

# たまのよこやま

特集

埋文センター  
新型コロナ対応記  
遺跡だより  
市谷薬王寺町遺跡







残念ながら2020年の上半期は世界的に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）との闘いとともにあったと言わざるをえないでしょう。年明けに中国・武漢で始まった流行は、瞬く間に日本を含む世界中に広がり、この原稿を執筆している8月現在の時点でも未だ猛威を振るっています。医療や物流関係を始め、社会の維持のためこの未知のウイルスに対して奮闘するあらゆる方々の努力に最大の敬意を表します。

新型コロナウイルスの影響は、当センターにも及びました。2月末から3ヶ月超におよぶ臨時休館とその後の再開館という経験は、館の歴史において初めてのことです。もちろん喜ばしい事態とは言えませんが、将来同じようなことがまた起きないとも限りません。むしろこれを奇貨として、今回の経験を未来に少しでも生かせるよう、コロナ禍に対して当センターがどのように対応したのか、記録に留めておきたいと思います。



まずは国内全体の状況を振り返ってみましょう。日本国内で最初の感染者が確認されたのは1/16、それから瞬く間に累計感染者数が増え、2月下旬に100人、3月中旬には1000人を超えました（ダイヤモンド・プリンセス号を除く）。3/24には東京オリンピック・パラリンピックの延期が決定、4/7には東京都等に緊急事態宣言が発令され、ようやく解除されたのは5/25です。

そのような中で当センターは2/29から臨時休館することとなりました。2/27には全国の小中高校への臨時休校要請が出されており、全国的に感染の蔓延に対する危機感が高まりはじめていた時期です。最終的には休館期間は5月末まで延長することになり、3/20開始予定の新企画展示「リケイ考古学」はもちろん、3月以降に予定されていた体験行事・講演会等も全て中止・延期となりました。例年ならば、連日の小学校見学に加えてGWの「縄文ワクワク体験祭り」で年一番の賑わいを見せるは

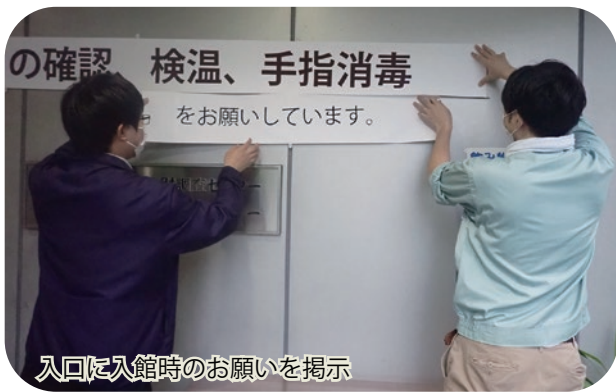
ずの4・5月も、埋文センターはひっそりと静まり返りました。

お客様に来館頂けない状態で、どうすれば喜んで頂けるのか、広報学芸担当は頭を悩ませ、新しい試みにも取り組むことにしました。Webを通じた情報発信等、外出自粛の中でも楽しめるコンテンツを開発することや、ウイルスとの共存を前提として今後の行事運営方法について全面的な見直しを進めること等です。

在宅勤務など、普段と勝手が違い思うようにいかない中でこれらの取組を手探りで進めていきましたが、そうこうするうちに、5月も半ば近くになると緊急事態宣言の効果もあってか、感染者数の増加ペースも落ちてきました。全国の39県では5/14に緊急事態宣言が解除、東京都も神奈川県・北海道等とともに5/25に宣言解除となりました。

こうなると今度は再開館に向けた準備です。開館は6/1に決まりましたが、課題は山積みです。来館するお客様の感染を防ぎつつ楽しんでいただくためにはどうすべきなのか。入場人数の制限はすべきか？団体見学の受入れは？エレベーターが業務用の一台しかない中で、脚が不自由な方が来られた際の検温等の対応はどのようにすべきか？他の博物館・美術館も同様であったことでしょうか、試行錯誤とリハーサルを繰り返してどうにか再開館にこぎつけました。来館される方にはマスクの着用はもちろん、入館時の検温・手指消毒をお願いし、一度の入場人数にも制限を設けました。ひとまずは体験コーナー・図書コーナーは閉鎖とし、また、当館は実



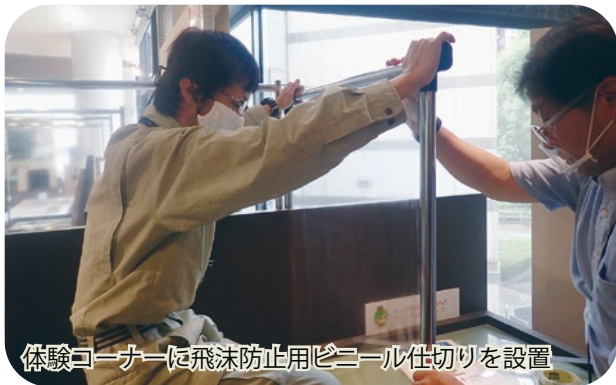


入口に入館時のお願いを掲示

際の縄文土器にさわることが展示の目玉の一つでしたが、こちらも感染防止のため、やむを得ず休止としました。

私たちが万全を期して臨んだかいてもあって、お客様は6/1の再開館初日から途切れずにお越しいただけました。もちろん例年より人数は少ないですが、面倒な制限がある中で多くの方に来館いただけたことは、職員にとってなによりの励みとなりました。

開館してしばらくたつとwithコロナでの運営にも少しずつ慣れたこともあり、当初閉鎖していた箇所の開放についても検討を始めました。体験コーナーにはブースごとに消毒用アルコール容器を備え付け、かつブース間にビニールの仕切りを設けることで感染リスクを低減し、再開することにしました。立入禁止にしていた庭園の竪穴住居も火焚きを行っ



体験コーナーに飛沫防止用ビニール仕切りを設置

### 感染防止徹底宣言



感染拡大防止ステッカーと見守りサービスポスター



ている時以外は人数制限を設けて入れるようにし、東京都のQRコードによる見守りサービスも導入、感染拡大防止事業所のステッカーも掲示しました。

7月からは小学校の団体見学の受入れもはじめました。長らくの外出自粛から解放されたせいか、見学する小学生たちの表情はいつも以上に明るく見え、元気をもらえます。



小学校見学解禁第一回目 熱心にメモをとる

休館中に検討していたことも少しずつ形になり始めています。講演会や体験行事も、感染防止策を講じることが出来るものから再開することにしました。Twitterの投稿頻度も増やし、7月にはYouTubeチャンネルも開設しました。

新型コロナウイルス感染症はまだまだ収束する気配を見せません。ワクチンが開発されるまで、あるいは開発されたとしても「古い生活様式」に戻ることはできないのかもしれませんが。当館も手探りではありますが、コロナ後の日常に即した「新しい展示様式」を作り出し、これまで以上に来館者の皆様に楽しんで頂けるよう、工夫をしていきます。感染防止についても、出来る限り最大限の対策をとっていきますので、これからも私たち東京都埋蔵文化財センターの活動にお付き合い頂ければこれ以上の喜びはありません。

(舟木 太郎)



YouTube用に火起こしの動画を撮影



# 新宿区 市谷薬王寺町遺跡

いちがやくおうじまちいせき

所在地：新宿区市谷柳町 43-1

調査期間：2020年1月～2020年9月（発掘）

調査面積：1,340㎡

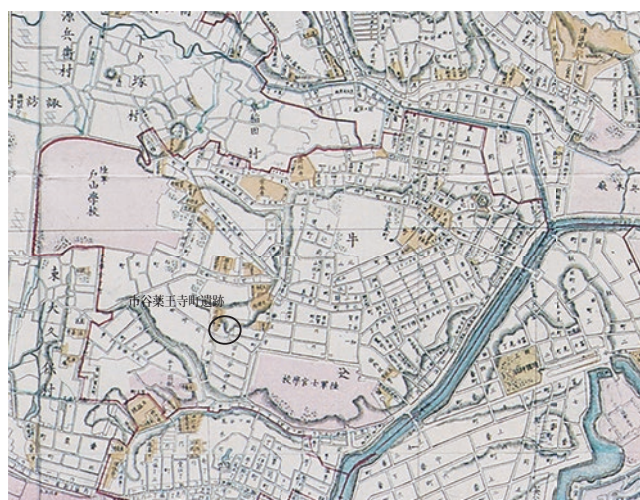
新宿区市谷薬王寺町遺跡（新宿区遺跡番号 55：新宿区市谷薬王寺町 43 番地 1）は、武蔵野台地東部の「淀橋台」の台地上に位置します。本調査地点の東側は、「市谷台」より、江戸川橋付近で神田川に合流する開析谷であり、外苑東通りはほぼこの開析谷の谷底付近を南北に縦走します。また、調査地点北側は、市谷柳町交差点付近よりこの開析谷から分岐する支谷（東京女子医科大学方面へ一通称「水野原」と呼ぶ）の崖線を形成します。市谷薬王寺町遺跡の調査は、現在までに地点を分け9回実施されています。本調査地点の埋蔵文化財発掘調査は、令和2年（2020）2月1日～同年9月30日まで実施しました。調査対象面積は 1,340㎡です。

江戸時代の市谷薬王寺町遺跡は、御府内の境界である朱引きに面しているものの、朱引き外（場末）に区分されます。『御府内場末往還其外沿革圖書』「市谷桂寺境内其外寺地小屋敷辺の部」によると、「延宝年中之形」（1673～1681年）では街区全域が旗本「横田次郎兵衛」の屋敷です。また、「元禄六酉年頃之形」（1693年）も同様に全域が「横田甚右衛門」屋敷地です。本調査地点は、両者の図中では屋敷北西隅の範囲となり、屋敷表門は外苑東通り側に向きます。「享保十巳年之形」（1725年）では、街区が小区画（旗本屋敷）に区分された姿となり、街区を東西に区分する道路（往還）が敷設されます。本調査地点は、西より「三浦主水」・「内山七兵衛」屋敷地となります。幕末である「當時之形」（嘉永年間（1848～1855））では、「尾張殿」・「大久保寛兵衛」屋敷地となります。明治期に入ると、この近辺には比較的大きな邸宅が造られます。本調査地点の東側には「児玉邸」（児玉源太郎）が見られ、本地点においてもレンガ建の邸宅が認められています。

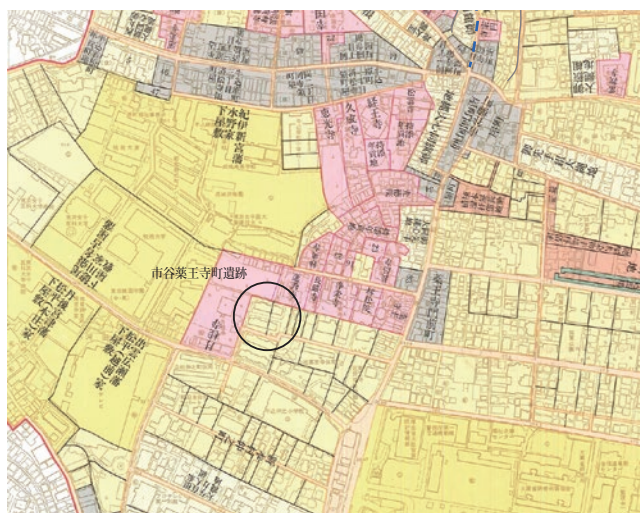
本調査地点は、基本的に江戸時代の旗本屋敷に帰属する遺構の調査が主体です。その他、若干ではありますが、関東ローム層上層の自然堆積層中より縄文土器が出土しています。関東ローム層面により示される大まかな地形は、西側が台地の平坦面を形成し、東側に進むにつれ谷へ向かう緩い斜面となります。東西の標高差は、1mほどあります。調査地点全体でみると、



地盤高図と市谷薬王寺町遺跡の位置  
『東京及横浜地質調査報告』付図（復興局 1930）より作成



『明治十二年実測東京全図』部分 東京都立中央図書館所蔵

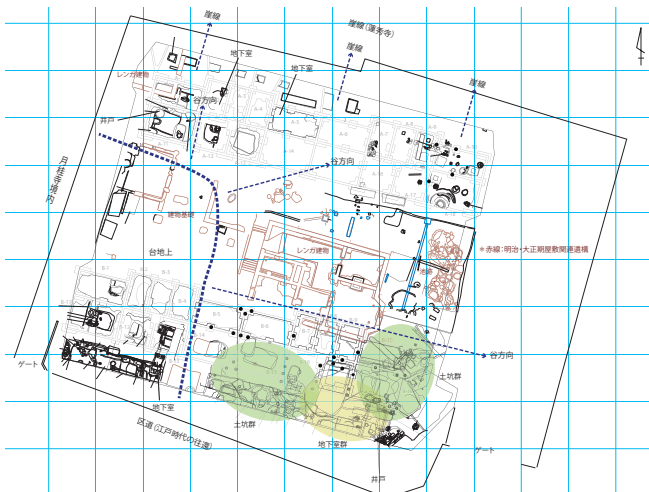


『江戸復元図』29-09（飯田橋）より部分 東京都教育委員会（1989）

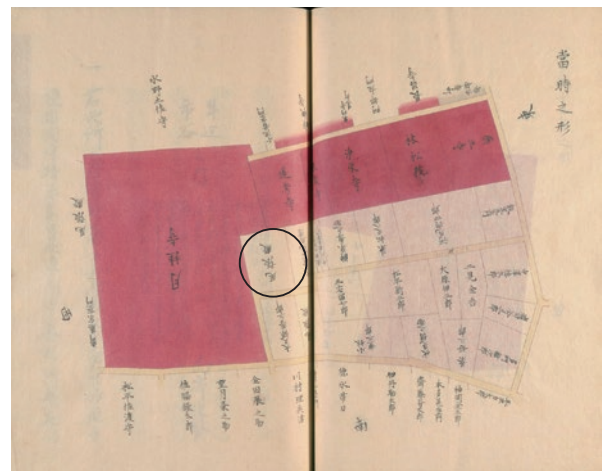
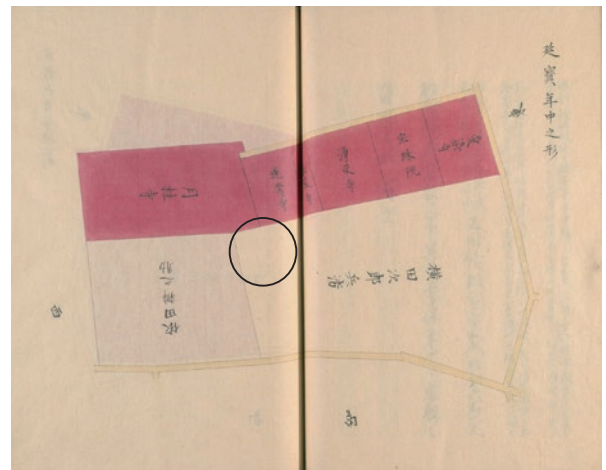


北側と南側に既存建造物の基礎があり、この柵目状の基礎に囲まれる範囲は、調査前の地表面より約-1.0～1.5mの深さまで削られています。但し、削られてはいますが部分的に遺構が残っている箇所もあります。また、既存建物に挟まれる中間範囲では、明治期のレンガ建物を確認しました。この建物および関連構築物の基礎はコンクリートです。現段階では、構築時期は不詳ですが、少なくとも関東大震災（1922年）で倒壊したものと判断できます。

遺跡を調査するうえで土層の堆積状況を知ることは非常に重要です。本調査地点の状況では、概ね現地表面より約-0.3～0.5mの深さでレンガ建物構築時点の整地層上面が認められます。さらに、自然堆積層（縄文土器包含層）上面および関東ローム層上面との中間位置（概ね現地表面より約-0.7m付近）で関東ローム層土を主体とする整地層上面が確認されます。この整地層上面は、上記『御府内場末往還其外沿革圖書』に示される屋敷地変遷の時期（寛永から延宝年間、元禄六年、享保十年、嘉永年間）に対照させると、今のところ享保年間（1716～1736年）頃を想定しておきます。江戸期旗本屋敷を構成する遺構は、建物関係施設（礎石、石組基礎、ピット）、上水関係施設（井戸）、構築施設（礎石を伴う地下室）、土坑（素掘りの地下室、ゴミ穴と考えられる土坑、土坑、ピットなど）などです。出土遺物は、近世陶磁器・土器・瓦が主体です。レンガ建物と一連の施設である池跡では、明治以降の陶磁器に交じり江戸期の鍋島焼（盛期鍋島-17世紀末から18世紀初頭）が複数出土しています。おそらく、この所有者の家に伝世していたものか、あるいは当時の骨董として入手したものか、住人の趣向を考える上で興味深く思います。（石崎 俊哉）



令和2年市谷薬王寺町遺跡調査地点遺構配置図 (S=1/800)



『御府内場末往還其外沿革圖書』牛込拾九亭  
安政三辰年十月調 国立国会図書館所蔵



地下室群 (北より)



礎石をもつ地下室 (北より)



# いま あの遺跡は現在！？ Vol.15

## — 日野市 No.16 遺跡・神明上遺跡 —

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかをご紹介します。もしかしら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

東京都の日本橋を起点に、長野県の塩尻市までをつなぐ国道 20 号線。江戸時代の甲州街道と中山道を基に、東京都西部を縦貫し、神奈川県、山梨県、長野県を結ぶ国の重要幹線道路です。これらの都県の人々の移動のみならず、物流を含めて極めて重要な道路ですが、その重要さに比例して交通量も多く、古くからの市街地を通ることから、交通渋滞も頻発しています。そのため当初の街道筋を離れた場所に新道を設定したり、市街地を避けるバイパス工事が各所で行われています。

今回ご紹介する日野市 No.16 遺跡・神明上遺跡の調査地点は、現在の国道 20 号線日野バイパス区間の坂下交差点付近に位置します。発掘調査は 2004 年から 2005 年まで行われ、旧石器時代から江戸時代に至る各時代の遺構・遺物が見つかっています。特に古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺構・遺物が多数

発見されました。

注目される遺構として、No.16 遺跡の範囲から、平安時代の河川跡とそれに伴う水場遺構が検出されています。当時使われた大量の墨書須恵器などの他に、多くの木製品が見つかりました。

これらの木製品の中には鳥形木製品や齋串と思われる串状木製品など“まつり”に使われたと思われるものも含まれています。他にも木簡や硯など“公的な施設”で使われる遺物も含まれていることから、先程挙げた“まつり”に関わる遺物は、当時の役人層の人たちが河のほとりでおこなった“水辺の祭祀”に関わるものかもしれません。

現在の私たちの生活を支える道路の下には、当時の人々の“いのり”の場が眠っていたのです。(武内 啓)

◆調査成果が掲載された報告書

2007『日野市 No.16 遺跡・神明上遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告書第 213 集 東京都埋蔵文化財センター



写真1 発掘調査前の調査地点（黄枠線内）。東側（写真黄破線上側）が神明上遺跡、西側（写真黄色破線下側）がNo.16遺跡。  
写真2 調査で見つかった旧河川跡。

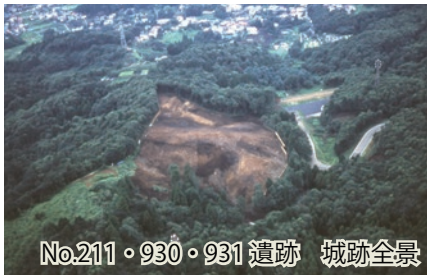


写真3 調査地点の現在の状況。国道 20 号線日野バイパス区間、坂下交差点を東から臨む。  
写真4 調査で見つかった木製品。封緘木簡（ふうかんもっかん）（左）、鳥形木製品（右上）、齋串状木製品（右下）など“まつり”（水辺の祭祀）との関連や、使用者の身分を示す資料となる。

No. 211・930・931 遺跡では、戦国時代後期と考えられる城郭跡が発見されました。遺跡は町田市小山ヶ丘、京王電鉄多摩境駅の北東側に該当します。多摩川水系と境川水系の分水界から南に延びる尾根上に位置し、境川の谷底から約 20m の切り立った崖の上で、相模原台地や津久井方面を見渡すことができます。

発掘調査は、1989 年から 1991 年にかけて、約 33,000 m<sup>2</sup> の範囲で行われました。発掘調査前には全く予想されていませんでしたが、尾根部の発掘を進めていたら大きな堀が発見されました。

それを受け、周囲の地形を確認してみたところ、平らな面や急な崖が故意に作り出されたように確認することができ、城郭であることがわかりました。



No.211・930・931 遺跡 城跡全景

城郭跡は東と西を深い谷に挟まれた切り立つような尾根の上にあります。埋まった

土を取り除く発掘調査は斜面に張り付くように行い、とても大変な作業でした。城を下から攻めると同じ動きになりますから、大変なものも当然でしょう。

さて、城郭は 1 号郭と 2 号郭の二つの郭から構成されていました。郭とは、土塁や堀などによって構成される城の区画で、江戸時代の城ならば「本丸」や「西の丸」などが相当します。1 号郭は北側の高いところにあり、約 1,200 m<sup>2</sup> の平らな面からなりますが、堀などはありませんでした。一方、南側の一段低いところにある 2 号郭は約 2,600 m<sup>2</sup>。二重の堀が巡っており、堀の掘り残しである「土橋」、郭の前に突き出た「馬出し」などの施設を有していました。これは、

敵の南北からの侵入を防ぐとともに、東西の谷からの攻撃に対する防御も意図



1号郭

した構造になっていると言えます。

発掘調査では城郭と同じ時期と考えられる遺物は全く出土していませんでした。また、本城郭に関する文献や伝承もありませんので、城の名前も由来もわかりません。しかし、戦国時代後半、後北条氏に関わる城郭であると推定されます。

というのは、①後北条氏に関係する八王子市小田野城や神奈川県松田町松田城と遺構の特徴や縄張りが似ていること、②南側に鎌倉街道上道、北側に八王子と横浜方面を結ぶ浜街道が走ること、③西側に津久井城のある津久井方面を望むことができることか

ら、後北条氏の城郭で津久井城の支城的な性格であると考えられます。

周囲の地表面を見回したところ、発掘調査範囲の北側には堀

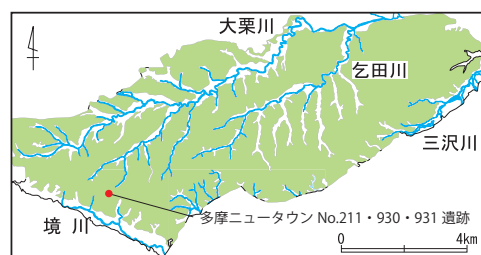


2号郭

や土塁の痕跡は見当たらず、南側には堀状のくぼみや土塁状の高まりがあって南の尾根の先端の方に向かって城郭が展開していることがわかりました。すなわち、1 号郭を一番高所にして、南側に向けて郭が展開していたものと理解できます。

とすると、一番北側の 1 号郭は堀を持たず、防備に一番大切な尾根の上位の守りが弱くなります。郭に建物や柵の柱跡が全く発見されないこと、遺物が全く出土しなかったことから、本城は完成することなく廃された、未完成の城であると考えたほうがよさそうです。この城で戦は行われなかったのです。

多摩ニュータウン地域で発見された後北条氏の時代の城跡はこれだけ、少し前の時期の No. 513 遺跡（稲城市大丸）と合わせても 2 つしかない貴重な「しろもの」です。（伊藤 健 [令和 2 年 7 月脱稿]）





# 木から情報を採取する

## — 企画展示 **リケイ考古学** に寄せて —

古来、木と日本の文化とは切っても切れない関係にあります。台地の上の遺跡を掘っても、木製の出土品に出会う機会は滅多にありません。土に埋められると朽ちて無くなってしまふからです。ところが、江戸の、特に下町あたりの遺跡の場合は正反対、各種の食器や調度に用いられた漆工品、<sup>おけ</sup>桶・<sup>たる</sup>樽から家具・建築材に至るまで、数万点以上の木製品が出土することもあります。木は、地下水が満ちていた土の中では何万年でも良好な状態で残るのです。

海辺を埋め立てて町を広げた江戸・東京は、木の保存にとって正に絶好のフィールド。加えて、江戸は優に百万を超える人々が居住した世界最大の都市ですから、そこで用いられた木製品・木材も半端な量ではなく、江戸は木製品の研究にとって最良のフィールドと言っても過言ではありません。ただ、物言わぬ木製品たちに歴史の証言者となってもらうためには、一寸とした工夫も必要です。ここに「リケイ考古学」の技が光ります。



例えば、江戸市中に整備された水道（上水）。その総延長は一説には 150km にも及ぶと言われ、しかも、これが幾度となく改修されたわけですから、ここで用いられた<sup>もくひ</sup>木樋と呼ばれる木製の水道管も数万の単位に及びはらずです。これらの水道はいつ頃整備されたものなのか、また木樋にはどんな木が使われていたのか、そしてこれほどの量の木材をどこから調達してきたのか。これらの疑問に答えるためには、木の年輪や眼に見えない組織を調べます。



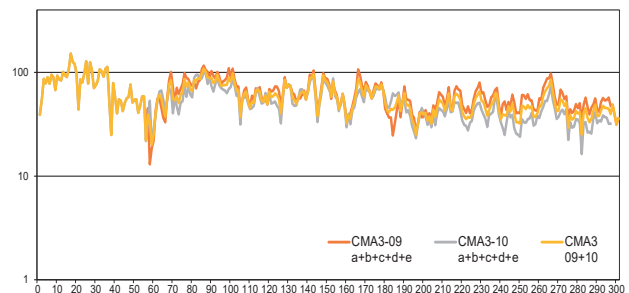
一例をあげてみましょう。水道が整備された年代、すなわち木樋の設置時期を明らかにするには、使われた木材がいつ頃伐採されたのか（伐採年代）を突き止めることが大きな手掛かりとなります。そこで

重要なのが「年輪」です。木の年輪は、1年ごとに刻まれる木の成長記録ですが、その幅は気候や降水量の差によって年ごとに若干の違いがあります。一方、同じ地域や同じ種類の木であれば、年輪幅の変化はほとんど同じパターンを示します。このような年輪の特徴を生かし、まずは伐採された年代が明らかかな木を用いて、年ごとの年輪幅の変化をグラフ化した標準曲線が作られます。この曲線に、木樋に使用された木材の年輪の変化パターンを照らし合わせることで、木材が伐採された年代に近い暦年代を得ることができるのです。この方法を年輪年代法と呼びます。千代田区丸の内三丁目遺跡の木樋の場合、使用された木材は、年輪年代法によって江戸時代前期に切り出されたことがわかり、神田上水初期の木樋であることが確認されたのです。

年輪以外にも、木には様々な情報が含まれています。そしてそれを引き出すのが「リケイ考古学」。続きはぜひ展示室でご覧ください。（長佐古真也）



丸の内三丁目遺跡から出土したヒノキ製木樋（左）と年輪を計測した木樋断面（右）



丸の内三丁目遺跡出土木樋の年輪曲線

※今号の表紙：5年前の9月に遺跡庭園で撮影した赤いキノコ。今年の秋はどんなキノコが見られるでしょうか？

